

## 序説：[特集] 肝細胞癌の画像診断と病理・病態 現状と将来展望

著者	松井 修
雑誌名	画像診断 = Japanese journal of diagnostic imaging
巻	29
号	6
ページ	553-553
発行年	2009-01-01
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/34893">http://hdl.handle.net/2297/34893</a>

## 肝細胞癌の画像診断と病理・病態—現状と将来展望—

## 序説

松井 修\*

肝細胞癌(肝癌)の画像診断についての特集を編集部から依頼された。あまりにも common diseases であり、また数多くの論文や解説があるので新味のある特集を組むことは容易ではない。当初は大変躊躇したが、一方で、日常診療で毎日のように悩むのが小さな早期の肝癌の診断である。そこで、こうした肝癌画像診断における今日の問題を個人的に整理する気持ちで本特集を引き受けた。これまでに肝癌の画像診断の研究は数限りなく行われ、また画像診断機器・造影剤や診断技術の進歩は著しい。にもかかわらず、依然として日常診療で簡単に診断が可能なのではない。何が肝癌画像診断の問題なのか？私自身、この30年間肝癌の画像診断に取組み、いくつかの問題点を解明してきたが、それでも毎日のように判断に迷う肝腫瘍に遭遇する。理由はいくつかある。なかでも最大の理由は、我々が最大の診断目的とする、完全に完治可能ないわゆる早期肝細胞癌が、周辺の硬変肝結節に肉眼形態・結節内脈管構造に加えて種々の内包する機能が類似するからである。約30年前に経動脈性門脈造影下CT(CTAP)を小肝癌の精密な検出を目的として導入し、約5mm前後までの肝癌が検出可能となったが、同時に、典型的な多血性肝癌が、門脈血流を内部に有する乏血性の結節から進展することを見出した(多段階発癌の発見)。その後、こうした結節の組織学的解析からいわゆる早期肝細胞癌が明らかにされたが、その当時から、こうした早期肝細胞癌の画像診断の困難さが予想された。すなわち、門脈血流はある時点で突然欠如するのではないのである。次第に連続的に減少するのである。どの時点からが“癌”なのか？その後綿々とい

の問題に悩まされ続けてきたと言える。この問題は画像診断のみならず、病理診断においても長く論争があり、現在も完全に解決されたわけではない。しかしながら、これらは、困難な問題にもかかわらず、確実に解明・解決に向かって前進を続けている。さらに、これらに加えて、肝癌の治療法や病理病態の理解の変遷に応じて、画像診断の目的にもそれなりの変化がある。2009年の時点におけるこうした問題の到達点を画像診断の立場からまとめ・記録することは有意義であろう。以上を本特集の目的とする。

執筆は現在肝癌の画像診断に最も積極的に取組んでおられる方々をお願いした。すでに多くの知見があるものから最新の現在臨床研究が進行中のものまで、できるだけ幅広く執筆頂いた。また、画像診断の背景となる病理についてはこの分野の信頼できる専門家に解説いただいた。

肝癌とその類縁疾患には、まだまだ多くの問題が画像診断にもまたその背景となる病理診断にも残されている。最新の知見を学ばれると同時に、また限界や問題点を理解して、日常診療の糧としていただければ幸いである。

## Foreword

Osamu Matsui\*

\* Department of Radiology, Kanazawa University School of Medicine

\* Matsui O. 金沢大学大学院医学系研究科経血管診断学(放射線科)